

銀行・学校法人のキャリアから転身 ホスピスは社会に必要なものです

函館おしま病院の事務長に就任した松田啓さん

松田さんと福徳院長とは高校時代（函館ラ・サール高校）の同級生だ。「学生時代から優しい人でしたが、医師になってからもそれは変わりません。昔から偉ぶるようなところはまったくない人でした」。

松田さんは明治大学商学部に進学。卒業後は北洋銀行に就職し、支店での営業勤務を経て札幌の本店国際部で外国為替の業務を担当した。二八歳のとき縁があって大学から幼稚園まで一〇校を擁する総合学園の学校法人野又学園（函館市高丘町）に転職した。

「当初は学園本部や函館医療保育専門学校に勤務しましたが、平成九年からは函館短期大学で総務課長や教務課長、入試広報課長を同時に任されるなど忙しくも充実した日々を送っていました」

医療法人敬仁会函館おしま病院（福徳雅章理事長・院長）の理事・事務長に就任して五ヶ月が過ぎた松田啓さんは、異業種である医療業界に転身した理由を「院長の人柄が素晴らしいからです」と説明する。

福徳院長からの要請に覚悟を決めたのは一年ほど前。「ホスピスを作るといふ自分の夢に突き進んでそれを実現した福徳院長は、友人であると同時に尊敬できる人です。事務長就任の依頼に応じたのは、自分しかい

ないと言ってくれたことが決心を後押ししました」。四月一日から新しい職場となったが、現在は事務長の職責が非常に重大であることを痛感していると話す。

「ホスピスがどういふものであるのかを徐々にわかってくると、以前に思い描いていたイメージとはまったく違っていました。死を目前にすると希望はないと思いついていましたが、最期まで自分らしく生きるといふことは素晴らしいことであり、また最期まで生き抜く力はすごいと痛感させられました。そして自分は健康で暮らしているのだから、もっと食欲に生きなくてはいけないと思うようになりました。ホスピスが社会に必要とされるものであることがよく理解できます」



事務長に就任した松田啓さん

ホスピスからパワーをもらっているという松田さんは、前事務長の長浜康平さんからもパワーをもらったと話す（長浜氏は今年七月に死去された）。松田さんが四月一日に同院へ赴任したときは、長浜氏は体調がすぐれずに引き継ぎは数日間だけだった。その長浜氏は最期を函館おしま病院のホスピスで過す。松田さん

はそこで話をする機会が幾度かあり、事務長としての理念やマインドなどを教わったと言う。「最期の引き継ぎでした。病室で『あとは任せたま』と言われました。ホスピスに入院して痛みもなく、看護師はじめスタッフの対応の素晴らしさに満足そうでした。開設から六年間やってきたことは間違いでないことが確認できたと話をしていました」

「教育も医療も『人』が礎となる。「良い医療を実践するために、職員を採用して育てていくことが事務長としての大きな役割です。まずは九月の病院機能評価の更新をしっかりと行っています」。

秋はマラソンのシーズンだ。松田さんは福徳院長とは同じマラソンチームに所属している。「最初に函館ハーフマラソンを走ったときの感動はとて大きかったです。今年は七回目の参加で、年毎に練習回数が減りタイムも遅くなってきました。おりましたが、時間内完走を目標にがんばります」